

2013. 5. 23

# 縮小社会の研究と生活実践

植田 弘

## ① 縮小社会化の必烈、破壊への暴走と其の阻止

文明の本質 (拡大成長 + 人口爆発 → 限界の壁 (地球、人間、生命))  
文明の罪 (原罪) — 自己中の "善悪" — Eurocentric violence = 争い、没落、崩壊の雪崩を阻止できるか? 未来社会を展望し、希望を持つべきか?

## ② 「科学者」からの脱離、生活者への近

1968~、学問紛争と恨みの日々  
「専門力」... 工業文明と科学への根源的疑問 — 現実逃避への反省  
食糧危機の不可避と農業 — 農への未理解への反省

## ③ 使・捨の時代を考へる会の出発と争いの日々

1973~ 手づくりミソ、古紙回収 — 健康、環境  
1975~ 安全食糧供給センター設立... 縁(援)農 - 農家との出会い、畑仕事

## ④ 学んだことのあれこれ

ミソ — 争いの必烈、ニッパカビの言い分  
食糧問題 — 共生と安定 — 共生社会主義 (互恵性と自立)  
生産と消費の分析、利害対立の不幸 (金銭支配と農の不平等、食の不安心)  
有機農業の思想 (提携と協同、自立と共生) による社会

## ⑤ 未来展望を欠く生活実践からの前進を

使・捨の時代を考へる会、その夢みを実践する  
植根具足の日夫と福島野菜の共同購入の昏睡  
解脱できる、植根との "四つ袢" — 簡素な暮らしで、反文明、反消費、反競争

## ⑥ 生活実践に裏付けされる縮小社会の展望を

「思想より生活実践」と生活に裏付けされる管理理論、からの脱離を!  
日々の生と生存 — 安定と反競争、反発展  
「あるがままに見る」(ゴッマ)。 — 「死の覚悟」「生の強靭さ」

## 農産品取扱いの方向性について

- ① 私たちを取り巻く食糧事情は量と質の両面で厳しい状態になっている。よく知られているように日本の食糧自給率は50%以下で、今日では約半分の食糧を外国に頼っているのだ。すなわち、もし世界に異常気象や国際政治の動乱がおこったなら、私たちが戦時戦後に経験した以上の飢餓に見舞われる危険が十分あることを、これは意味している。そして、このような状況の改善の見通しは立っていない。農地の宅地・工業用地・道路などへの転用はすすみ、専業農家は減る一方である。昨春の中・高卒者92万人のうち、農業を継いだ者はわずか一万人という統計が、農村の将来を予言している。さらにまた、農業は工業生産性との競合を強いられ、機械化・化学化により変質し、化学肥料・農薬の多用で農地の荒廃はすすみ、農産品の安全性もいちじるしく失われた。そのことは私たちの健康維持にも悪影響を与えている。

- このような荒廃はいったい何によってもたらされたのか。あの高度成長で「便利で豊かな生活」が拡大し、その波は農村と農村生活にもおよんだ。都会に華やかな生活があるとき、誰が泥と汗にまみれて働くことをするだろう。不必要な自動車を高速で走らせるために、地力豊かな土地はブルドーザーのエジキと化した。私たちが、便利だ豊かだと浮かれて使い捨ての大量消費をすすめればすすめるほど、それを支える工業は肥大し、資源は浪費され、環境破壊は拡大し、そして農業はさらに荒廃していく。このことに思いをいたすなら、私たちは安全な農産品を安定して確保したいと希望する前に、自分自身の生き方・考え方に、真剣で鋭いメスを加えるべきではなからうか。その努力を行わずして、ただ安全なものが欲しいと叫ぶだけでは、結局それはエゴイズムでしかない。本会が、安全農産品を「考える素材」として重要視しているのは、その努力をみんなで積みかさねたいためである。

- それにしても、事態は深刻の度を加えている。私たちができることは、すぐに着手しなければならぬ。そのささやかな一部が安全農産供給センターの設立であり、具体的な「農産物の生産・供給・消費における新しい流れの形成」である。農業の荒廃とともに私たちの生活態度が放漫になりきった現代においては、この作業は容易なものではない。多くの困難が次々とたちあらわれるに違いない。それらをのり越えるためには、生産者、消費者の深い信頼に基礎をおいた緊密な協力が不可欠である。消費者の喜びを喜びとする生産者が、また生産者の喜びを自分の喜びとしうる消費者と結びついて助け合うことなくして、私たちの前に道はひらけない。個々の局面で一喜一憂したり、自己の利益を主張しあったりせずに、すべてを前向きに、さらにお互いの役割を尊重しあうことが必要なのである。

- 私たちが、ひとつの家族のような緊密な信頼に結ばれたひとつの輪をつくり、生産者・消費者の立場の違いを超えて協力する努力を始めたのなら、この輪は狭く閉じることなく広げていかねばならない。この努力の継続によってこそ、安全な農産品の安定した供給は実現する方向に向かうだろう。

(1973年・使い捨て時代を考える会時代を考える会の1月例会で採択)